



典礼委員会担当司祭 菅原友明

今月のポイント①

奉献文の結びの栄唱、

会衆は「アーメン」のみ

「すべての誉れと栄光は世々に至るまで」は

司式者のみ

奉献文の結びに、司祭はパンとぶどう酒を高く掲げて、「キリストによってキリストとともにキリストのうちに、聖霊の交わりの中で、全能の神、父であるあなたに」と唱えますが、その続きの「すべての誉れと栄光は世々に至るまで、アーメン」の部分は、会衆も加わって全

員で唱える傾向が見受けられます。ラテン語規範版でも日本語現行版でも会衆が

唱えるのは「アーメン」のみと規定されているのですが、日本の『典礼聖歌』で、この栄唱を歌唱する場合、会衆が「すべての誉れと栄光は…」から加わるように

指示されていたために、歌唱しない場合にも、この部分から一緒に唱える習慣が生じてきたようです。今回の改訂では、

このような混乱や不統一を解消するために、栄唱を歌唱する場合にも歌唱しない

場合にも、会衆は「アーメン」のみを唱えることとなりました。

ミサの中で何度も「アーメン」を口にする私達ですが、とりわけここでの「アーメン」は、奉献文によって語られ成し遂げられたキリストの贖いのみ業全体への賛美と感謝と確認の「アーメン」なのです(※1)。神学生時代、典礼学の授業で、この「アーメン」が「大アーメン」とも呼ばれているのだと聞いたことを覚えています。会衆の唱える言葉が減って残念だという思いもあるかもしれませんが、むしろ、この「アーメン」に

すべての思いを込めることもできるでしょう。

今月のポイント②

世の罪を取り除く神の小羊、

いつくしみをわたしたちに

「平和の賛歌」も口語に変更

これまで「神の小羊、世の罪を除きたもう主よ、われらをあわれみたまえ」と唱えられてきた「平和の賛歌」も、他の賛歌と同様に口語に変更され、「世の罪を取り除く神の小羊、いつくしみをわたしたちに」となります。結びも「われらに平安を与えたまえ」から「平和をわたしたちに」となります。また、表題にはラテン語が加わり「平和の賛歌(アニヌス・デイ)」と表記されるようになります(※2)。なお、他の賛歌と同様に、歌唱する場合には、これまで通り「神の小羊…」と歌うことができます。

※1 『ローマ・ミサ典礼書の総則(暫定版)』79参照。

※2 「平和の賛歌」はラテン語の歌い出しの語を取って、広く「アニヌス・デイ」(神の小羊)とも呼ばれています。